



ル人の子どもたちにな学びの場を

日本国内でも、日系ブラジル人が特に多い中部地区。言葉や文化の違いから、学校になじめない子どもたちも多い。彼らの不安を取り除き、充実した学校生活を送れるように。ブラジルの日系社会での教育活動が、帰国後、日本国内の日系ブラジル人支援につながるはずと信じ、中部地区の先生が奮闘している。

中部地区



ブラジル人の先生と一緒に、子どもたちに体育の授業を行う片桐さん。「ブラジルで外国人として暮らすことで、日本に住む日系ブラジル人の子どもたちの立場で物事を考えられるようになりました」(撮影:今村健志朗)

日系社会青年ボランティア現職教員特別参加制度

JICAボランティアの現職教員のための特別参加制度の一つ。2008年の「日本人ブラジル移住100周年」を契機に、青年海外協力隊の制度に新設された。日系ブラジル人が多い地域の教員が対象。ブラジル政府公認校に派遣され、日本語、情操教育の指導、日本文化紹介などを行う。2年間の活動を通じて、ブラジルの文化や習慣への理解、ポルトガル語の習得ができる。帰国後は各県の学校に戻り、その経験を日系人子弟の指導に生かすことが期待されている。

日本で学ぶ日系ブラジル人の子どもたち

「さあ、今日は日本語を勉強しましょう!」
ここは地球の裏側、ブラジル最大の都市サンパウロ市近郊のサンベルナルド・ド・カンポ市。幼小中高の一貫校、アルモニア学園の教壇に立つのは、日系社会青年ボランティアの片桐努さん。2009年8月から、この学校で日本語や体育などを指導している。

片桐さんは、現職の静岡県の中学校教諭。JICAが08年から日系人支援の一環としてスタートした「日系社会青年ボランティア現職教員特別参加制度」の第一期ボランティアだ。日系人が多い地域で教える教員たちを、ブラジル政府公認校に派遣するこの制度。現在、18人が現地で活動している。

「静岡県の学校で、私も日系人生徒の担任を受け持つことがありました。彼らの立場に立ち、どのように接していけばいいか、ずっと試行錯誤していました」と片桐さん。そこで出会ったのが、JICAの日系社会青年ボランティアだった。「中部地区の教員を対象に、新しく現職教員特別参加制度ができたのを知って。子どもたちの祖国であるブラジルに身を置き、彼らのバックグラウンドを学びたいと思ったんです。」

日系ブラジル豊か



派遣先のクラブ活動の一環で、現地の生徒たちと和太鼓の練習に励む愛知県の中学校教諭・加藤博子さん(右)(撮影:今村健志朗)

自動車関連の企業が多い中部地区は、日系人の出稼ぎ先として、多くの外国人が暮らしている。そして1990年の「入国管理及び難民認定法」の改正により、その数は急速に増加した。隣人やクラスメイトがブラジル出身ということも、この地域では珍しくない。母国から遠く離れた異国での生活。彼らは、日常でさまざまな問題に直面している。その一つが、子どもたちへの教育だ。

「公立の学校では、日本人と日系人が机を並べて勉強しています。言葉や文化、価値観の違いが重なり、日本の学校になじめない子どもも少なくないようです」と愛知県教育委員会の金原宏さんは話す。現在、愛知県内で日本語を母語としない小中学生は5000人以上。豊田市や知立市などでは、全校児童の半数近くが日系人という学校もあるほどだ。県レベルでも「日本語教育適応学級」を設置して個別指導をしたり、ポルトガル語のできる語学相談員を派遣したりと、教育環境改善のためにさまざまな取り組みを実施してきた。しかし現場では、「まだまだ拾い上げられていない問題がたくさんある」という。

中部からブラジルへ子どもたちの懸け橋に

このような状況を打開しようと、現在ブラジルで奮闘している中部地

区の先生たち。「ブラジルのすべてを吸収し、帰国後の教育に生かしたい」と意気込む。

また現地でも、現職教員である日本人ボランティアに対する期待は高い。活動の一環として、ブラジル人の教員に対して、カリキュラムや教材づくりのアドバイスも行う。「ブラジルと日本では、学校のシステム、教師の価値観、仕事への意識がまったく異なります。いかに現地に合ったやり方で、日本の学校の良い点を伝えていくかが、最も苦労する点です」と片桐さんは話す。それでも「私自身がブラジルで試行錯誤した経験は、日本で暮らす日系人児童の理解にきつとつながると思います」と頼もしい。

昨年12月、片桐さんたちの活動を視察するため、JICAは教育関係者で調査団を結成。静岡県教育委員会の宮崎正さんも、調査メンバーの一員として現地に赴いた。「ブラジルの学校関係者と話をして日系人が抱える問題を共有でき、とても参考になりました」と宮崎さん。「ポルトガル語を懸命に学びながら奮闘している先生方の姿を見て、帰国後への大きな期待を感じています」と話す。さらに、「特に若手の教員に、この制度を活用して勉強に行ってほしい。まずは片桐さんたちに現地の経験を話してもらい、興味を持ってもらえれば」と展望を語る。



片桐さんの配属先アルモニア学園は、日系人が約3割を占める。校内には、日本とのつながりが感じられるものがたくさんある

